

人文科学研究

—第 13 号—

目次

◆2015 年度修了者修士論文要旨	1
◆院生会組織	6
◆2015 年度院生会活動記録	7
◆『人文科学研究』投稿規定	9

2015 年度修了者修士論文

【地域文化専攻】

鎌田 真緒 オープナースキルが対人関係の形成に与える影響

【言語文化専攻】

藤原 隆史 A Study on Causative verb *HAVE* and
Its Application to TESOL/TEFL

川村 朋子 Neatly Near to Norse:
A Study on Scandinavian Loanwords in *Ormulum*

内山 綾華 近代日本における画家の表象
—黒田清輝・青木繁・萬鉄五郎を中心に—

オープナースキルが対人関係の形成に与える影響

鎌田 真緒

「聞き上手」という言葉があるように人の話を引き出すことを得意とする人がいる。聞き上手な人は、相手の思っていることや相手自身について、意識的、または無意識的に引き出す能力を持っていると考えられる。社会心理学領域では、オープナー(opener)という概念をもって聞き上手さを説明しており、オープナー研究は、性格特性との関連や、会話相手に及ぼす影響など多岐にわたって行われている。

どのような行動、または態度、もしくは能力が人の話を引き出す要因となっているのか、様々な研究が行われてきた。しかし、存在する聞き上手さの指標は、聞き上手か聞き上手ではないかという特性を測定するための尺度であり、一次元的な概念として想定されている。オープナーに関する研究をより精緻に行い、実践的に役立たせるためには、オープナーを一次元的な特性と捉えるだけではなく、その特性がどのような能力から構成されているのかも含め、多次的にとらえ、それを測定するためのものさしが必要であると考えられる。そこで本研究では、オープナーを多面的に捉えることが可能なオープナースキル尺度を開発した。会話の中に冗談を入れるようにする“ユーモア”，気の利いた質問をすることが出来る“他者配慮”，相手が話しているときに口を挟まない“非会話阻害”，会話の最中に相手を見るようにする“視線”，秘密を洩らさない“秘密厳守”，会話の最中にうなずいている“うなずき”，人と話しているときに笑顔でいる“笑顔”の7つの側面が確認された。さらに、質問紙法と観察法の双方により、妥当性を確認した。

オープナーが集団内の関係性に与える影響について議論している研究は、皆無である。オープナーは、自身の良好な対人関係を維持するのみではなく、他者を開示させることで、会話相手に影響を与えるという点で、他の社会的スキルとは少々異なる。オープナーのスキルが他者に直接影響を与えるものならば、集団の場においてもオープナーは重要な存在であると考えられる。集団内において、個人が自己開示をする程度の変動は「個人の特性」による影響の変動と「個人と評価者の相互作用」の影響による変動という2つの階層があるといえる。マルチレベル共分散構造分析を行った結果、相互作用レベルでは、友人であると認知することや、親しみやすいという印象を持たれていることが他者の開示量を高めていた。オープナースキルの高低にかかわらず、そのような関係性によっても開示を高めることが示された。個人特性レベルでは、オープナースキルの下位概念である“雰囲気づくり”がメンバーからの開示を増やしていた。このことから、関係形成の後期において、“雰囲気づくり”をする能力が高い者ほど、メンバーから開示を引き出していることが伺える。さらに、等高線マッピング法(小杉・藤原, 2004)により、集団内の関係性を図示し開示量とオープナースキルの関連を解析した。結果、オープナースキルが低い者より高い者は、グループが統合した関係を築いていると認識していることが示唆された。結果、関係前期・後期の双方において、オープナースキルの低い者は高い者より集団の関係性に葛藤が生じていると認識していることが読み取れた。高いオープナースキルを持つ人物は、他者を開示させることに長けており、相手のことを知ることで自分と相性の良い友人関係を形成していると考えられる。今後のオープナー研究、特に集団内のオープナーの効果を検討するには、メンバーとの関係性にも着目するべきだろう。

A Study on Causative verb *HAVE* and Its Application to TESOL/TEFL

藤原 隆史

本論文は、英語の使役動詞 *have* について考察を行い、その知見を英語教育に応用する。使役動詞 *have* は、学校文法に於いて、他の使役動詞 *make*, *let* と共に同一項目で扱われ、*make* は「強制」、*let* は「容認」、*have* は「使役・許容・受け身・保持」の意味を持つと説明されることが多い。(安藤 2005) しかしながら、当該使役動詞は、(i) *make* だけが非人称主語を許容し、また、*have* 文だけが、(ii-a) 「目的語+原型不定詞」という形式に加え、さらに、「目的語+現在分詞・過去分詞」という言語形式も許容し、(ii-b) 受け身の意味をもつという大きな差異があるにも関わらず、これらの差異は、ほとんど教えられないことはない。よって、使役動詞の学習に於いて、3つの使役動詞はほぼ同一と教えられるものの、言語形式が実は一様ではなく、また、その意味解釈も多様であることから学習者が混乱をきたすことがある。

Have 使役文の先行研究は、大きく分けて2つのカテゴリーに分類することができ、その片方がさらに3つのサブカテゴリーに分かれていると考えられる。すなわち、①素性を用いた説明と、②意味論的観点からの説明である。②は、②-1 意味用法を列挙したもの、②-2 *Have* 文に最小限の意味解釈を認めるもの、②-3 単義と意味誘導条件に基づいて説明したもの、の3つに細分化される。しかしながら、これらの先行研究のどれもが、当該使役動詞がもつ上の2点の差異について十分な説明を行っているとは言いがたい。すなわち、(i)なぜ *make* だけが無生物主語を許容するのか、(ii)*have* 使役文が(a)様々な言語形式を許容し(b)意味解釈が多様であるのはなぜか、という2点である。

本論文では、上記の先行研究が課題としている上記2点について考察を行い、当該三使役動詞の差異についての考察を行った。本論文は、3つの理論的枠組み、すなわち、①認知不協和理論、②語彙概念構造(LCS)、③概念化者を用いることで、上記(i)及び(ii)の問題を説明した。英語の使役動詞に於いて、*make* と *let* が LCS で表された語彙概念構造に於ける「原因」に焦点を当て、尚且つ概念化者が「主語」を事象の原因と解釈すれば *make* を、「目的語」を事象の原因と解釈すれば *let* を用いることを明らかにした。さらに、概念化者が事象の「結果」に焦点を当てる場合には *have* が用いられ、使役の用法は、「結果があればその原因がある」という類推によって用いられることを示した。このことは、OEDの記述から歴史的にもサポートされることを明らかにした。その上で、使役動詞の「棲み分け」がどのようになっているかを図示し、学習者にとって分かりやすい説明をすることが可能となった。

さらに、本研究は、得られた知見を用いて、英語学習者にとってより分かりやすい教授法を考案した。その教授法の効果を確認するため、松商学園高校の2年生及び3年生と、信州大学の1年生に対して新しい教授法を用いて実験を行った。まず、高校2年生と大学1年生に対して予備実験を行い、新しい教授法の実効性について調査を行った。その調査で新しい教授法の効果が期待できることが分かったため、同じ英語レベルを持つ高3年生のグループを2つ用意し、従来の教授法と新しい教授法を比較する実験を行った。実験の結果、新しい教授法を用いて教えたグループの方が、ポストテストに於いて高い伸び率を示した。以上のことから、本研究に基づいて作成された教授法が教育効果の高いものであることが分かった。

Neatly Near to Norse: A Study on Scandinavian Loanwords in *Ormulum*

川村 朋子

本論では、中英語初期に East Midland で約 1200 年頃に制作された韻文説教詩 *Ormulum* に現れる古北欧語からの借入語について考察する。*Ormulum* とは Ormin という名のアウグスティヌス修道会の律修司祭がウルガタ聖書を中英語で註釈し説教として用いるため作成し、作者 Ormin 自身の定めた正書法に基づいて書き下ろされた、約 20000 行からなる韻文である。East Midland はデーンロー地域であったため、*Ormulum* の英語は北欧からの移住者の言語の影響を多く受けていることが確認できる。

デーンロー地域のヴァイキングとアングロサクソン人がどれほどの言語認識をされていたのかを図るために、Townend は地名の検証が最も有利であるという (51)。古英語本来の地名の母音あるいは子音が古北欧語の持っていた音韻形態に取って代わられた検証が彼の研究の中で明らかにされている (43-87)。しかし、地名が記され始めたのは 1066 年のノルマン征服以降であり、その時期に古英語と古北欧語が共存し、互いに影響を受けていたという実例を *Ormulum* の中に見出すことが出来るという (201-211)。

Ormulum の中に現れる互いの言語に影響された実例というのは、Hockett の”switching-code”理論に基づいて説明することが出来る。それは、ある言語を話す人が自分の話す方言と違う方言を聞き、それと認識したときに、自分の方言の音素形態に合わせ話すようになるというものである (Hockett 43)。

古英語の音素と古北欧語の音素はゲルマン語派ということもあり、近い関係にあったが、ヴァイキングの影響を受けデーンロー地域では両言語はさらに近い言語になったことが言える。本論では、デーンロー地域の中英語というのは、古英語の音素形態というよりもむしろ、古北欧語の音素形態に近かった方言であることを示すため、動詞を用いて、母音交替する強変化動詞、弱変化動詞がどのような音素形態で中英語に借入されたかを借入された形態をもとに考察を行う。

Ormulum には古北欧語と古英語が混ざった方言が多く使用されている。その混ざった方言が、古北欧語由来と考えられるのか古英語由来と考えられるのかを考察する。East Midland に住む古英語話者にとって古北欧語は外来語と認識されながらも、容易に借入できる地域であることを示し、デーンロー地域に住んでいた古英語話者、そして古北欧語話者は共通理解が図れていたと結論づける。

近代日本における画家の表象 —黒田清輝・青木繁・萬鉄五郎を中心に—

内山 綾華

本論は、近代日本、明治後期から大正にかけての画家の表象についての研究である。とくに取り上げるのは、この時期の代表的な画家である黒田清輝、青木繁、萬鉄五郎の3人である。彼らについての研究は、その生涯や作品の一つ一つにまで多くの研究成果が報告されている。またそれぞれが生前に残した言葉も記録として残っており、彼らの死後に纏められ出版されている。しかし、これまでの先行研究は3人の作品を通してはなされてこなかった。特に彼らの自画像については、図版などに必ず載せられるものの比較がなされることはない。近年、黒田と萬の展覧会が行われた際も、師弟関係や明治期と大正期の比較、または自然主義と表現主義などの対比で留まっている。そこで黒田と萬の中間に青木を位置づけることによって、ただ対比するだけではない、彼らの作風の変化が見えてくるのである。

本論は以下のように展開する。まず第1章では、近代日本における自画像のジャンル化を探る。日本へ輸入された油彩画の展開とそこに見える自画像の存在を指摘し、さらに当時工部美術学校で外国人教師によって行われた油彩画教育を確認する。また工部美術学校の出身者によって結成された明治美術会、その流れをくむ太平洋画会、さらに明治美術会と対比関係にあった白馬会、3つの会における「自画像」という名称の作品の確認と出品作品である山本芳翠と黒田の自画像には旧派と新派の違いがあることも指摘する。次に第2章では、黒田・青木・萬に注目し、さらに東京美術学校の卒業制作における自画像制作のカリキュラムと、それに関わりのあった彼らの多様な自画像をたどる。これによりジャンル化後の自画像の作風の変化をより明確にする。また、黒田・岡田らによるレンブラント自画像の模写についてと、萬と後期印象派との接点を指摘し、彼らの自画像が海外の作品から受けたであろう影響を確認する。

第3章では、引き続き3人の作品を、画家の表象を導き出すための「画室(アトリエ)」「画中画(イメージの中のイメージ)」の観点から見ていく。黒田は同じ境遇に置かれた久米桂一郎を画室に描くことで、彼を介して西洋画家へと変化(西洋化)する自身を確認いたのではないかと指摘する。また彼は背景に画中画を配置することにより、画室に絵画を飾るという展示の様子を示している。萬は、画室に制作中の自分と画材、裏面の画布を描くことにより、作品の制作プロセスを示している。萬は画中画に過去の作品を用いることにより自身の作品を再確認・再提示する。青木は画室も画中画も描いてはいないが、明治美術会と白馬会、太平洋画会の出品の様子を確認しても分かるように、青木と同時期に画室画や画中画が制作されていることから、描かなかったことが彼の特徴であったとする。第4章では、黒田・青木・萬の「自画像」「画室」「画中画」と彼らの言説を照らし合わせる。これにより、これまでの章で確認してきた、彼らがそれぞれに描きだした画家の表象の違いをより明確に指摘していく。

信州大学大学院人文科学研究科 院生会組織

院生会長（1名）

院生会統括（院生会の意見総括、院生総会開催、大学院委員会との連絡、各行事幹事、連絡事項管理）

会計（1名）

院生会費管理（会費徴収、物品購入、収支報告）

書記（1名）

記録類作成及び管理（院生会議事録、院生会活動記録）

シンポジウム委員（1名）

シンポジウム運営（シンポジウム連絡、原稿集作成・配布）

広報（1名）

院生会活動報告（写真撮影、院生会ホームページ運営）

院生会雑誌『人文科学研究』編集委員（1名）

『人文科学研究』編集（雑誌作成、投稿受付）

- 任期はそれぞれ一年間とする。
- 役員は基本的に M2 から選ばれるが、シンポジウム委員の半数は M1 から選ばれる。
- 次年度役員を選出は各年度の 1 月中に院生総会を開き、そこで行う。ただし M1 からシンポジウム委員については年度初めの院生総会において選出する。
- 役員選出は立候補及び推薦による。
- 各役職の兼務は各年度の院生会員の人数に応じて認める。
- 休学や留学等の長期の不在やその他のやむを得ない事情の場合、各役員の交代を認める。
- 役員構成及び各役員の業務内容は基本的にこの通りだが、各年度の状況に合せた変更は可能である。

平成 27年度 信州大学大学院人文科学研究科 院生会活動記録

平成 27 年度院生会役員

院生会長 鎌田真緒

会計 川村朋子

書記 任意

シンポジウム委員 内山綾華

広報 任意

雑誌編集委員 石田大祐

.....

6 月 18 日 第一回院生総会 【於 院生室】

議題 1. 院生会組織説明

議題 2. 前年度会計報告

- ・同年度予算案
- ・院生研究会の実施決定、及び費用について

議題 3. 大学院委員会への要望、及びシンポジウムについて

- ・M1 に向けて、シンポジウムの概要説明
- ・シンポジウム及び人文科学研究科についての意見収集

.....

9 月 26 日 信州大学人文科学研究科大学院 前期シンポジウム 【於 人文ホール】

プログラム

▼10:10-10:50 藤原隆史 The “Habitat Segregation” of Causative Verbs
: An Analysis Adopting the Viewpoint of a Conceptualizer

▼10:55-11:35 石田大祐 「反芸術」再考
《点》と《紐》を捉え直すために

▼11:40-12:20 内山綾華 明治初期における自画像の変容
—黒田清輝・青木繁・萬鐵五郎の作品を中心に

▽12:25-13:15 休憩、自由討議、投票

▽13:20-14:00 懇親会、M1 自己紹介、優秀発表賞発表（石田大祐）

.....

1月28日 第二回院生総会 【於 院生室】

議題 1. 来年度役員選出

平成 27 年度院生会役員

院生会長 植田拳太

会計 鈴木映梨香

書記 任意

シンポジウム委員(M2) 山本直樹

広報 任意

雑誌編集委員 関森真澄

.....

2月10日 信州大学人文科学研究科大学院 後期シンポジウム 【於 人文ホール】

プログラム

▽09:10-09:20 研究科長挨拶、投票方法説明

▼09:20-09:50 山本直樹 心理動詞における一考察

▼09:55-10:25 植田拳太 マンフォードの批判はエリスの本質主義を脅かすか？

▼10:35-11:00 関森真澄 二次元自分らしさ尺度の作成の試み

▼11:05-11:35 鈴木映梨香 『仏説地藏菩薩発心因縁十王経』の世界

▼11:40-12:10 藤原隆史 An Analysis of English Causative Verb Have and its Application to English Education

▽12:10-12:55 昼食、懇談

▼13:00-13:30 寺澤誠人 『地上』研究

▼13:35-14:05 中村寿々葉 『オイディプス王』パロドスにおけるレトリック

▼14:10-14:40 藤沢翔 *just now* の意味—時制の観点から—

▼14:45-15:15 森江かおり 旧東ドイツのドイツ語—感情を扇動する語彙使用

▼15:20-15:50 久保陽子 アルベール・カミュ「ルイ・ランジャール」について

▼15:55-16:25 サボー・シルヴィア 90年代前半の美術に登場する「かわいい」

▼16:30-17:00 新山正隆 戦後ドイツにおける大戦総括世論形成の推移と要因
—「謝罪を続ける宿命」とドイツ「歴史家論争」—

▽17:00-17:30 優秀発表賞投票、軽食、懇談

▽17:30-17:45 優秀発表賞の発表(植田拳太・鈴木映梨香)

『人文科学研究』投稿規定

原稿の種類

1. 修士論文要旨
2. 後期シンポジウムにおける発表原稿
3. 寄稿論文

投稿資格

信州大学人文科学研究科に在籍する者、もしくは過去に在籍したことのある者。
ただし上記 1 と 2 については、当該年度に同研究科に修士論文を提出した者に限る。

原稿審査

それぞれ審査委員会にて行う。審査委員会には院生会員のほか、必要に応じて教員も加わる。

分量

それぞれ無制限

(提出形態の詳細については、編集委員会に問い合わせること)

提出先

信州大学人文科学研究科 院生会『人文科学研究』編集委員
連絡先：jb-in@shinshu-u.ac.jp

締切

毎年二月末

人文科学研究科 第 13 号

平成 28 年 9 月 28 日 発行

編集者 信州大学人文科学研究科院生会

発行者 信州大学人文科学研究科委員会

〒390-8621 松本市旭 3 丁目 1 番 1 号信州大学人文科学研究科内
